



加藤正紘さん

株式会社ニセコ雪森考舎 取締役

ニセコを「森」から考える

林業の課題に向き合うことで見えた、地域の生活と可能性

ロゴマークのついたガラス戸の向こう、赤い屋根の建物の中にその事業所がある。壁一面の大きな窓からは、木々と丸太のそばを通り抜けた穏やかな陽の光が静かに差し込んでいる。どこか懐かしい雰囲気のある廊下を進んだ先にあったのは、沢山の材木、町で見かけた木製の自転車スタンド、デスク、そして黒板。「ここは元々学校だったので、卒業生だった方が遊びに来てくださって、昔話を聞かせてくださったのは、この場所を拠点とする『株式会社ニセコ雪森考舎』（以下、雪森）の取締役・加藤正紘さん。ニセコ町の林業と森林に寄り添い、まさに新たな風を生み出している加藤さんにお話を伺った。

森を考える、森から考える

雪森は、ニセコ町の森林や木材の課題を解決し、地域資源の循環活用を促進することを目的に2023年3月に設立された。その具体的な取り組みとして、「森林整備の総合ガイド」と「木材活用の総合ガイド」という2本の柱に基づいて、6つの事業領域と13のサービスを提供している。林業関連業務のマッチングや人材育成、木材や森林空間の活用から資源の新たな付加価値の創出に向けた研究・イベントの実施に至るまで、あらゆる方面から森林の課題に向き合っている。そのアプローチは、一次産業から三次産業、林業業界の言葉で言うところの川上から川中、川下までの工程すべてを見据えている。

中でも印象的なのは、森林状況に対する各種の調査や森林所有者への相談対応など、林務に関わる一部の役場業務を代行する「林務代行事業」である。この事業は、雪森の設立経緯とも関わっている。

ニセコ町林業、再始動へ

加藤さんのお話によると、ニセコにはかつて木材に関わる11の事業所があったが徐々に少なくなっていき、昭和41年には地域の森林組合も解散してしまい、森林・木材に対して細部まで対応が行き届かないような状況に陥ったのだという。また、ニセコ町のような人口5,000人前後の自治体では、国から森林環境税の交付を受けながらも、役所の担当者だけでは全ての林務に対応しきれないことから、該当の

税がうまく利用されず基金に積み立てられていくばかりになっているところも少なくないそうだ。そこでニセコ町は、積み立てられた森林環境税の一部を雪森の立ち上げの財源などに充て、公益的な側面を持つ会社として雪森の設立を果たした。しかし、森林所有者の権利や管理といった複雑な事情を背景とする課題を抱え、近隣に製材所も無いという状況の中、ほとんどゼロから始めるような形で事業がスタートした。そうした状態から、事業の輪郭を定めて他の事業者の方から応援されるようになるまでには、整備されていない森そのもの向き合うことはもちろん、関わる人々との信頼関係を築くことも大きな要素であった。

一歩ずつ広がっていく接点

2019年にニセコ町に関わって以来、2023年の会社設立まで4年の月日をかけて関係者と綿密なコミュニケーションを続けていったという加藤さんは、この雪森という場所を「地元に入り込みながら、もっと地域に開いていく



ような形にしていきたい」と語る。住人としてその地域に住んでいても、木材や森林に触れる機会が少ないと、林業や森そのものに対するイメージが限定されてしまうのだという。だからこそ、地域とのコミュニティを重視し、「地域とコミュニケーションをとりながら、一緒に課題解決に向けて動けるようになるといい」という意識で林業の課題に取り組んでいる。

それでも、「接点という点で見るとまだ足りていない」と語る加藤さんは、

「(接点を)すぐに大きく広げていくのではなく、まず森林に近い方に向けて広げていく」のだと教えてくださった。雪森は、小中高生を対象とした林業ツアーなどのほか、市民向けの公開講座や、森林を舞台としたサイクリングコースや乗馬体験といったイベントや普及活動に取り組んでいる。こうしたイベントで主なターゲットとなるのは、おそらく生活のすぐ近くに森林の存在が見出せる人々だ。こうした催しを通して、森や林業への関心を少しずつ広げていく

ニセコ雪森考舎が取り組む、6事業の領域

1 森林関連業務の 需要整備事業

事業のマッチングなど

2 森林関連事業者 サポート事業

人材育成や資材・工具の貸出など、事業者のサポート

3 林務代行業務

林務の一部を代行、DX化などの強みを活かした活動も

4 森林空間活用 事業

森林空間のマッチングや、森林・木材に関する普及活動

5 ニセコ森林 高付加価値化事業

広葉樹についての活用方法の開拓・研究

6 木材活用事業

活用を通じた、木材に対する付加価値の付与

ことで、十分な管理に至っていない森林の所有者や、森とのつながりが遠い人々にも、森林の存在を認識してもらえる可能性が生まれるという。森林が、管理や所有に関する問題だけでなく、景観や環境の保護といった多様な側面と課題を抱えるからこそ、そこに関わる人同士の理解が必要なのかもしれない。

「木育マイスター」の資格を持つ加藤さんは、子供だけでなく大人にも、「木育」は重要な意味を持つと指摘する。地域と、そこに関わろうとする試みとが、互いに互いを知ってもらおうとすることで始まることのあるのだろう。

望みを通じて地域へと関わる

このように、人と人、場所、出来事といった接点を繋いで、森と人とを繋げている加藤さんが、ニセコという場所と行き合った背景には、まちづくりへの強い想いがあった。

北海道出身だった加藤さんは、一時は東京へと移り住み、まちづくりのコンサルタントや建築デザインなどの業務を行っていた。しかし、「まちづくりや

都市計画によって地元である北海道に貢献したい」という思いがあった加藤さん。転職か、あるいは独立か……と考える中で出会ったのが、地域再生のプロジェクトなどを手掛ける企業・株式会社トビムシだった。そこから加藤さんは、林業を通してニセコの地域創生を行うという地域商社の立ち上げプロジェクトに関わる機会を得た。

それまで、コンサルタントとしてまちと接する中で、「提案で終わらずに当事者として地域に関わるべきではないか」という思いがあった加藤さんは、実際に該当地域に人員を配置してプロジェクトが実現するよう伴走するというトビムシの事業理念に共感したという。ものづくりを通して0から1を作り出すような関わり方に関心があったことも、一度ゼロになったニセコの林業の再スタートという事業と結果的に呼応した。「市街地の賑やかさといった部分に対しても、今はこの事業に集中し切っていますが、余力ができればやってみたいなと野望を抱いています」と、新たな仕組みを作り出すことに燃える

その眼差しは、現在もおお大きく展開し、木から森へ、さらに広く、地域全体をも捉えている。

すぐそばにある生活、すぐそばにある『資源』

そんな加藤さんから見たニセコは一体どんな場所なのか。その問いに対して、まず挙げてくださったのが、「個性的な人が多い」というところだった。移住者が多いことが特徴とも言えるニセコ地区だが、そうした場所だからこそ、移住者の世代交代が早く、いろいろな年代の移住者がいることでむしろ柔軟な認識が生まれるゆえに、世代間の断絶が少ないと感じるという。また、様々なキャリアを経て移住してくる人の中には、手に職がある人も少なくない。そうした背景のゆえに、都会とはまた違う意味で、個性を持った人々が集まる場所になっているのだという。

次いで、雪森のホームページ内にある『抛り所としての森』という語句との関連で指摘してくださったのは、「自然環境が近くにある」というところだ。ニセコ地区の人々は、幼少の頃から森林と隣り合って育つ。『自然保育』という形で野山に親しむ幼児がいて、ちょっとした家庭菜園かのようにキノコや山菜を採りに入る人がいて、林道を自転車で行く人がいる。そのように、「森の中で使える部分は思った以上にあって、そして思っていた以上にそういうことをする人が多くいるんだな」と気づいたという加藤さん。「趣味や余暇の延長としての森」がニセコにはあるのだという。「森は資源の宝庫なのだ」と知ってほしい」と語る加藤さんの、ニセコという場所に対する眼差しからは、環境や景観だけでなく食や生活といった側面に深く根づく、森の「資源」の多様さが伝わってくる。まちづくりに



携わってきた加藤さんだからこそ見える地域の側面だろう。もちろん、そうした自由な取り扱いには権利との兼ね合いでグレーな部分もあると指摘する。ルール制定を進めながら、共有財産としての「森の解放」を目指したいのだと語ってくれた。

森林と共に育ち続けるために

とはいえ、すぐに全てを実現させようというわけではない。取材時時点で、工場を兼ねたこの事業所における実働のスタッフは、加藤さんを含めた2名。ゆえに現在、三次産業にあたるような製品類を自分たちから営業して展開していくということはなく、あくまで依頼があった場合に対応するという形で、主な事業としては森の相談窓口としての業務を中心としているという。

このような、各事業への注力の仕方には加藤さん自身難しい部分を感じているように思われた。例えば、木を切り出してもその木を製材できなければ、ニセコ町産木材として使えない。「森林を資源循環していくためには川上から川下まで全体を網羅しなければいけないが、全体を網羅しよう

として始めると、薄く広くという状態になってしまって、すぐに効果が出てくるわけではなくなる。この”良いバランス”を取るということが、立ち上げ当初も苦労したし、今も苦労しているところです」と語る加藤さん。しかし、穏やかな語り口の奥には、果てしない追求心と今後の展開に向けた大志が存在しているように感じられる。

今後の展開に望むこととして、「もっと木が使われるといい」と語った加藤さんは、無責任な海外の素材の利用や「国内の森林が減少している」という誤解によって国産材の使用から遠ざかっているという現状に対し、「輸送による余分なコストや環境への負担は消費者にとっても重要なトピックになる」と指摘しながら、企業としての情報発信や国内での生産の重要性を教えてくださいました。

「情報発信は小規模に、でも続けていく」と継続の重要性を語る加藤さん。今後の人材募集についても触れながら、「多様な人材がいることによってできることがある」、「将来的には別の分野にも広げていきたい」と述べる。こうした言葉の背景には、着実に、

一歩ずつ取り組む加藤さんだからこそ見える、場所や人同士のつながり、土地のあり方があるように思えた。

「ニセコ雪森考舎」の名前には、パウダースノーで知られるニセコ町において加藤さんが感じた、「雪が降る・積もる森の景色を残し続けたい」という、「森」の視点から捉えた地域の風景が関わっている。「雪のある森はしんとして美しいんです。スキヤーの集まって活動するPOWでもニセコでもいつか雪が降らなくなるんじゃないかという懸念もされており、環境保全の意味合いも含めてこの名前をつけています。」と語る加藤さん。

こうしたお話からもうかがえるように、自分の想いや関心を起点に置いてみることで見える地域の側面があり、そこから立ち返って周囲の人々を眼差すことで広がっていく接点がある。加藤さんのお話からは、地域への関わり方についての新たな視点があるように思われる。そして加藤さんが関わるニセコ町の森林は、事業の舞台となる実際の場所であるだけでなく、林業や人々の生活そのものの集合体とも言えるのかもしれない。

